山岳党奇談

鞍馬天狗

大佛次郎

少年倶楽部
文庫

少年倶楽部文庫26
山岳党奇談

昭和51年4月16日 第1刷発行

著　者　大佛次郎
発行者　野間省一
発行所　株式会社 講談社
東京都文京区音羽2－12－21
郵便番号 112　振替 東京8－3930
電話 東京(03)945－1111(大代表)
編　集　株式会社第一出版センター
印　刷　図書印刷株式会社
製　本　株式会社大進堂

Printed in Japan　©野尻とり　1976
落丁・乱丁の際はおとりかえいたします。
定価はカバーに表示してあります。　(セ)

少年倶楽部文庫
26

山岳党奇談

大佛次郎

講談社

※目次※

第一章　雲と雨

白髪鬼　七
少年杉作　三九
ゆうれい坂　七五
宿なし天狗　一二三
常夜燈　一三七
くさりの輪　一五八

第二章　風の追跡

壬生の屋敷　一八五
魚とつり針　二二三
かつら　二四七

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erto

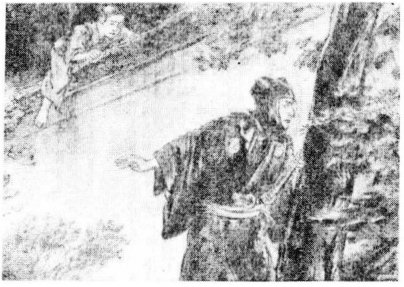
ねずみの生活　一七二
きえた敵　二〇六

第三章　決戦の日

仏師の家　三三一
逆襲　三七一
とらえられて　三九四
あやしいかご　四一二
あげぶたの下　四三一
死の宣告　四四五

装幀　安野光雅
挿絵　斎藤五百枝

山岳党奇談



第一章　雲と雨

白髪鬼

一

空が晴れてさえいれば明るい月のすがたが見えるはずの、あたたかな四月のある晩のことでした。京都の町は、夕がたから雲がひくくたれこめて、やがて、ひと雨くるかと思われるような、うっとうしい空もようでした。

ぶっそうなうわさが、人の口からたえぬ時世です。きのうはどこでだれがころされたとか、壬生の新選組の人々とよその浪人組とがどこそこできりあったとかいうような、おそろしい話が毎日のようです。……辻ぎりがはやる。用があっても夜は外へ出ないのにしたことはない、といわれるこのごろのことでした。

日がくれてから、町はひっそりとします。ことに、この雨もよいの晩は、どこも早くから雨戸をおろしていて、町なかでさえ暗いのですから、境内がひろく樹木がふかい寺ばかりの東山の一

角には、人かげも見えず、鼻をつままれてもわからぬようなやみが、土塀のあいだのせまい道をつつんでいるのでした。

ときおり、暗い木立ちの中でふくろうがなく。ほーほーとさびしい声です。声のする方角を見あげてみても、あのまるい目を光らせているとぼけたすがたは見えず、しげった木のえだがまっ黒にかさなりあって、風にうごいているのが見えるだけでした。

道は、だらだらとのぼり坂になっていて、そのまま東山の密林になります。このへんには、寺のほかに、場所のしずかなのを愛して、隠居所ふうの家や、いずれ都の物持ちの別荘と思われるひんのよいたてものが、ちらほらとならんでいます。

たぶん、その一軒をさがしていたものでしょう。講武所ふうに髪をゆったりっぱな武士がひとり、さきほどから、道の暗いのになやみ、たずねようにも人通りがないので、坂の中ほどに立ちどまっているのでした。これは、だれあろう、いま京都の町で泣く子もだまるほどその剛勇をおそれられている、新選組の統領、近藤勇でした。

近藤がここへきたのは、いまでいえば京都で知事と警視総監をかねたような役めにあたる所司代から、「ぜひあって話したいことがある。ご苦労だが今夜東山の別荘のほうへきてもらいたい」という使いをもらっていたからです。所司代の東山の別荘というのは、高台寺というお寺のそばのさびしい場所にあって、なにかひみつに会合するときなどには、もってこいの家なのでした。きょうの用事も、ふつうならば役所であえばよいものを、とくにこの別荘のほうへこいというのは、おそらく、なにかとくべつの重大なものにちがいないのでした。

近藤は、夕がたまで四条の茶屋で、土方歳三などの新選組の隊士たちと酒をのんでいたのですが、こっそりと席をはずして、ひとりでここへでかけてきて、

（たしか、このへんだったが……）

と思いながら、道の暗さにまよっているところでした。

（道をまちがえたのだろうか？　もう一つさきの築地の角をまがったところだったかな？）

ほー、ほー……と、さびしくふくろうがないている。それも、雨気をふくんだ大気が木々のえだをゆさぶっていて、そのざわざわという音にけされがちに、すぐ頭の上できこえるかと思うと、ずっとかすかに遠くきこえて、なんとなくぶきみさをましています。

思いなおして、いまのぼってきただらだら坂をおりていこうとして、近藤は、ふと人の足音をきいたように思って、立ちどまりました。たしかに、下のほうからこちらへ、だれかがあがってくるようすでした。やみをすかして、黒い人かげらしいものが、ちらとうごいて見えました。

（このへんの者なら、ちょうどいい。たずねてみよう）

こう思いながら、近藤は歩みをゆるめて、むこうが近よってくるのを待ちました。しかし、意外にも、その足音は、にわかにとだえています。

ききちがいであったか？

いや、そうではない。たしかにはっきりときこえたし、また、やみの中にうごくかげをちゃんと見ていたのです。なるほど、これは先方がこちらのすがたを見て、さびしい場所だから辻ぎりかなにかではあるまいかと、おそれて立ちどまったのかもしれない。近藤はこう考えて、歩きだ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erto

しながら、
「あいや」
と、声をかけてみました。
しかも、その人かげらしいものは見えないで、すたすたと、追うようにいそぎ足になる。両側は築地塀で、わきへそれる道もないのに、これはなんということでしょう？　七、八十メートル行っても、どこにも、その足音の主のすがたは見えないのでした。
おかしい。
けっしてそら耳ではなく、はっきりと人の足音がしていたのでした。しかも、たしかに、この木の下やみに人のすがたを見たのです。しかし、それがいないとすると、木のえだのうごくかげがそんなふうに見え、べつのなにかの音が、人の足音のようにきこえたものでしょうか。ふつうの人間だったら、どんなにかきみわるく思ったところでしょうが、新選組の近藤勇は、自分のうかつを微笑しただけでした。
右手は高台寺、左手は、これも寺かなにからしい。あれて瓦がおちている、長い築地塀にそって歩きだしています。しばらく行くと往来へ出ました。ここはさすがにまだ人通りがあるとみえ、遠く提灯の灯がしめった空気に黄ばんだ光をなげながら、ゆらゆらとなみ木のあいだを行くのが見えます。
近藤は、すこし歩いて、灰色の夜空に八坂の塔が黒い巨人のように立っているのを見ました。
（そうだ、ここだった！）

と、見おぼえのあるまがり角をさがしあてて、道をいそいだのは、それからまのないことだったのです。

二

京都所司代の駒木根監物は、近藤のくるのを待ちかねていたところで、すぐと、二階の客間へ通しました。監物は六十に近い老人で、やせて小がらな男ですが、さすがは徳川幕府から、このそうぞうしい京都の守りをまかせられている人物。どこかに針金のような強いところが見え、とくに、話のあいだにちらりちらりと相手にむける目に、ゆだんなく注意のはたらくのが、よくうかがえるのでした。

近藤は、約束よりおそくなったことをわびて、じつは途中で道をまよったのだと話しました。

「まちがえて、一つさきの路地をはいりましたもので、暗いし、きこうにも人は通らず、とんだめにあいました」

というと、

「一つさきの路地を？」

なぜか所司代はこういって、すぐに問いかえしています。

「どれだね？　高台寺の横か？」

「さようです」

ほう……、というように、所司代はうなずいて、
「それで、……だれにもあわなかったのかな」
と、近藤の顔をのぞきこむようにします。
所司代は、そのことになにかとくべつの興味を感じているらしいのです。近藤は、ふしんに思いながら、さっきの築地塀のあいだの道のことを思い出して、
「いや、だれかにあったら、きこうと思っていたのですが、だれも通りませんので、へいこうしたわけです」
と答えて、所司代の顔を見ました。
「ふうむ」
と、所司代は、息をもらして、
「人にあわなくて、しあわせだったのだ」
と、笑いながらいうのでした。
近藤には、なんの意味か、すこしもわかりません。なお、けげんらしく主人の顔を見て、そのわけを話してくれるのを待っているのでした。
「あんたは知らなかったのか？」
所司代は、きげんよく申しました。
「こんな夜ふけになって、あの、だらだら坂を通る人間はない。本通りを通る者も、あの入り口のところは見ぬようにして、大いそぎで通るようにしているくらいだ。あそこは、ばけものが出

るという評判なのだ」
「ばけものが？」
近藤は、あきれて笑いかけました。
けれど、意外にも所司代は、まじめな顔つきです。
「たぬきのいたずらですか？」
と、近藤は一笑に付するつもりでした。
すると、所司代は、
「いや、そうとも思われない。とにかく、へんなうわさがあるのだ」
と、いよいよまじめで、
「あんたは、あそこでだれにもあわなかったからいい。うそかまことか、わたしは見ないことだから知らぬのだが、このへんのうわさでは、きみのわるい話がある。なんでも、あの坂を通ると、髪の毛が銀のように白いじじいにあうことがあるそうだ。むろん、夜だ」
近藤は、また笑いかけています。
そうでしょう。所司代ともあろう人が、こんな怪談めいた話を本気ではじめようとは、意外でもあり、なんとなくおかしく思われたからです。
「どうもこまるな、まじめにきいてくれないのだから……」
所司代も苦笑しかけて、おりよく燭台のろうそくのしんをきりにきた若ざむらいを見て、
「お、原口、いま近藤氏にそこのばけものの話をしているのだが、どうも信用してもらえないら

しいのだ。おまえ、証人になって、そこへすわっていてくれ」
「は」
その原口とかいうさむらいも、やっぱりまじめな顔で命令をうけて、すこしさがったふすまのわきに、きちんとすわるではありませんか。
「原口、近藤氏はあの路地へはいってきたというのだぞ」
こういうと、原口もおどろいたような顔色になって、近藤を見ます。近藤はいよいよおかしくなって、
「どうもおどろきましたな。……とにかく、その髪の毛の白いじじいの話を、うけたまわることにいたしましょう。いったい、そいつがばけものなのですか？」
「まあ、そうだな。あんたはほんとにしないが、このへんのだれでもいいから、きいてみたまえ。女子どもにはかぎらない、りっぱな男が、本気でこわがって話すのだから……」
所司代は脇息を前にまわして両腕をのせながら、こう前おきして、話してくれました。
「とにかく、そのじじいを見たものが、幾人かあるのだな。そのときは、べつに害をしない。ただ、通りすぎていくだけだというのだが、そやつにあうと、あとがおそろしい。かならず、たたるというのだ。熱を出して死ぬか、あるいは変死する。実際の例がいくらもあるから、きみょうなのだ」
「それは、……拙者もあぶないところでしたな」
近藤は、まだからかうようなきもちです。

「さようさ。しかし、あわんというところをみると、ばけもののほうで、あんたの武勇におそれをなして、むこうがにげたのかもしれない。まずもって、ぶじですんでめでたいとでもいうか」

所司代も近藤も、顔を見あわせてどっと笑いましたが、さて、そんな話をきかされて、近藤が思いうかべたのは、自分がさっき、その木の下やみの坂道できいた足音のことです。いちどは、あれはそら耳だったかと考えたのでしたが、もしかしたら、あれがその老人の足音だったのではないか？

そのことを所司代にいおうかと思って、近藤はまた考えなおしました。いままで信じないような顔をしていて、急にそんな話をもちだしたら、それこそこんどは、ぎゃくにこちらが笑われることになります。

「まこととすれば、どうも奇怪せんばんな話ですな」

と、わずかに申しました。

「さよう。なんともみょうな話なのだ。京都は古い都だけによくそんなうわさがある。役目がら、あまりさわぎになっては、すてておくわけにもいくまいが、さて、これで、役人をやってしらべさせるとなると、またうわさが大きくなろうやもしれぬ。怪力乱神を語らずというから、すてておいているが、……この家に近いだけに、よくきかされるわけだ。ははは。……いや、その話はそれとして、今夜あんたにご足労をかけた件だが……」

所司代は、こういって、

「原口、おまえは外を見はっていよ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erto